

健育会の救急医療について

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



健育会グループは、リハビリテーションを中心とした慢性期医療において、質の高い医療を提供してきました。それぞれの病院、施設が地域に寄り添い、様々な貢献をしています。地域によっては、慢性期医療だけでなく、救急医療についても求められています。今回は健育会の救急医療という視点でお話しをします。

医療とは、地域から求められていることに応えてこそ、その使命を果たします。

例えば、西伊豆健育会病院は、地域住民や県民からの「救急病院を作ってほしい」という要望を受け、2次救急指定医療機関として「救急搬送を断らない」という理念のもと、運営をしています。長年にわたり、救急搬送された患者さんを必ず医師が受け入れ、適切な処置をおこなってきました。

在宅医療の面でも地域医療の充実を図り、地域とのコミュニケーションを重視しています。

また、湘南慶育病院では、質の高い慢性期医療の提供をしつつ、かねてより市から要望されていた急性期医療の受け入れも並行して進め、2次救急指定医療機関としても発展を遂げています。年々、救急患者の受け入れ件数も増加し、時には緊急の手術もおこない、地域の方々から厚い信頼と大きな期待を寄せられています。

その他の病院でも、健育会グループは地域の方々に寄り添い、救急医療の輪番の際には、患者さんを積極的に受け入れ、社会貢献をしてきました。



救急医療を扱う上で極めて重要となるのが、心肺蘇生スキルの獲得です。救急医療を受け入れていれば、おのずとその必要性を強く感じる場面が多くなります。しかし、心肺蘇生スキルは、救急医療を受け入れている病院の医師や看護師だけが習得していれば良いというものではありません。

心肺蘇生のスキルは、人の命を扱う医療従事者であるならば、理学療法士や管理栄養士など、どの分野の職員であっても、全員が習得すべき必須の技術です。

かつて、勤務時間外に街中で倒れた方に遭遇し、緊急措置をおこなって表彰された職員もいました。いつ、どのような状況であっても、倒れた方を目にしたら反射的に蘇生処置ができる人材の集まりであることが、健育会グループのポリシーであり、全職員の使命なのです。



健育会グループでは、全職員が医療人としての自覚を持つべく、いかなる状況においても突然の心停止に対応し、蘇生の手順を習得できる取り組みをおこなっています。

6月7日（土）には、湘南慶育病院にて、日本救急医学会認定のICLS研修をおこないました。ICLS研修とは、Immediate Cardiac Life Supportのことで突然の心停止に対して、最初の10分間のチーム蘇生を習得するための研修です。

今回の研修は、石川島記念病院の岩塚邦生先生がICLSの講師であることと、すでにICLSのインストラクターの資格を持っている西伊豆健育会病院4名の看護師のみなさんの支援により実現しました。



当日は、湘南慶育病院、竹川病院、熱川温泉病院、石巻健育会病院、石川島記念病院より、合計12名（看護師10名、理学療法士2名）が参加しました。座学に始まり、実際の心停止の場面に近い状況設定を元に、何度も心肺蘇生のシミュレーションを実技でおこないました。朝9時～夕方5時半まで充実した研修となり、参加者のみなさんは研修の終わりには、多少の疲労もありながらも自信を持った表情に変わっていました。



研修の最後には、参加者全員に日本救急医学会認定の研修終了証をお渡しすることができました。心停止という突然の事態にチームで蘇生する、まさに、救急医療のOur Teamの取り組みです。今回研修に参加された皆さんには早速、自分の病院に戻って研修の成果を発揮してもらい、周囲の職員の手本になるよう取り組んでください。

医療人である以上、突然の心停止に対する蘇生技術は全員が身につける必要があります。「人の命は何よりも尊い」という医療人としての哲学に基づいた行動をしっかりと習得し、医療従事者としての使命感を常に持ち続けてください。

